

所属	国際交流研究科 国際交流専攻 修士課程	修了年度	2017 年度
氏名	王 雪	指導教員	鈴木 章生

論文題目	20 世紀前半における日本人学生の中国調査旅行に関する研究 —『大旅行記録』から—
------	--

本文概要

本論文は、1901 年に上海で開学した東亜同文書院の日本人学生の中国調査旅行の「大旅行記録」(『東亜同文書院大旅行誌』雄松堂出版、『上海東亜同文書院中国調査記録』不二出版)を基に、20 世紀初頭から半ばの中国の生活・経済・社会を日本人学生がどのように見ていたか、旅行者の視点と特徴を分析したものである。

中国を舞台に活躍する日本人学生を育てる目的で設立した東亜同文書院は、日本国外における稀有な文化教育施設で、1939 年には同文書院という私立大学になる。ビジネススクール的な性格を持つ書院の歴史は近代日中関係史、特に文化交流史において重要である。1901 年から 45 年までの間に、有能な日本人学生約 5000 人がここに学び、切磋琢磨した。最終学年には旅行調査を義務付け、学生たちの自由な調査テーマと自由に選ばれたコースによって班が 10~20 程編成され、各班 2~6 名程度のグループで現地を旅行した。その記録がいわゆる「大旅行記録」である。

筆者は、700 余りに及ぶこれらの記録から、上海を起点に北・南・内陸と 3 つのコースを選び、時間と場所の移動を基軸に記録内容を丹念に読み込み、学生らの旅行の視点および当時の中国社会の様子を把握しつつ、旅行調査の意義を確認しようと試みた。

第 1 章「研究目的・研究方法」に続いて、第 2 章「上海東亜同文書院の成立と教育」では書院成立の歴史的経緯と教育の理念や目的など基本的な事実関係を整理した。第 3 章「日本人学生の中国調査旅行実態」では 1920 年前後の学生の調査旅行の実態を明らかにするため、上海から包頭・北海・青海の 3 つのコースの記録を丹念に読み込み、内容の把握を行った。第 4 章「中国調査旅行の分析」では、『大旅行誌』の地理学的研究の第一人者である愛知大学名誉教授の藤田佳久氏の時期区分に沿って、背景期(1901~05 年)、拡大期(1906~19 年)、円熟期(1920~30 年)、制約期や消滅期(1931 年満州事変~)での記述の特徴と変化を改めて分析した。第 5 章「東亜同文書院と「大旅行」の評価」は、前章の分析を踏まえて東亜同文書院の教育機関として果たした役割や学生旅行の意義を評価した。

筆者の結論は、以下の 3 点に集約される。①1917 年以降は、調査旅行と同様に書院が最も発展円熟した時期で、創立 20 周年には胡適や魯迅などの講演も行われるなど、書院と中国との関係はかなり良好であった。②学生の移動の特徴は都市も農村も区分なく面的な移動・拡大が見られ、北のコースでは衣食住の異文化理解に注目し、南のコースでは都市部の経済発展とともに中国社会の治安の乱れや混乱が観察され、内陸コースでは古都を訪れることで中国の歴史や文化に高い関心を持っていたことを指摘。③旅行は単なる観光ではなく、経済・外交・貿易・社会その他、様々な面からアカデミックな地域調査であったと特徴づけた。

これら筆者の指摘は、中国への経済進出を目的とする情報収集活動や経済戦略を身につけることを露骨に示したものではない。書院の建学理念である「貿易富国」を実現するため、学生が実際に現場を訪れ、直接見聞することで中国を肌で感じ、交流を目的とする行動であったと学生の調査旅行の教育的観点からの意義と効果の評価したものである。しかしながら、1931 年の満州事変以降の混乱のなかで、学生の大旅行が日本軍の要請に基づく諜報活動だとする説を解明検証するところまでは踏み込んでいない。本論文のテーマに関して、今後の課題の一つとして挙げられる。